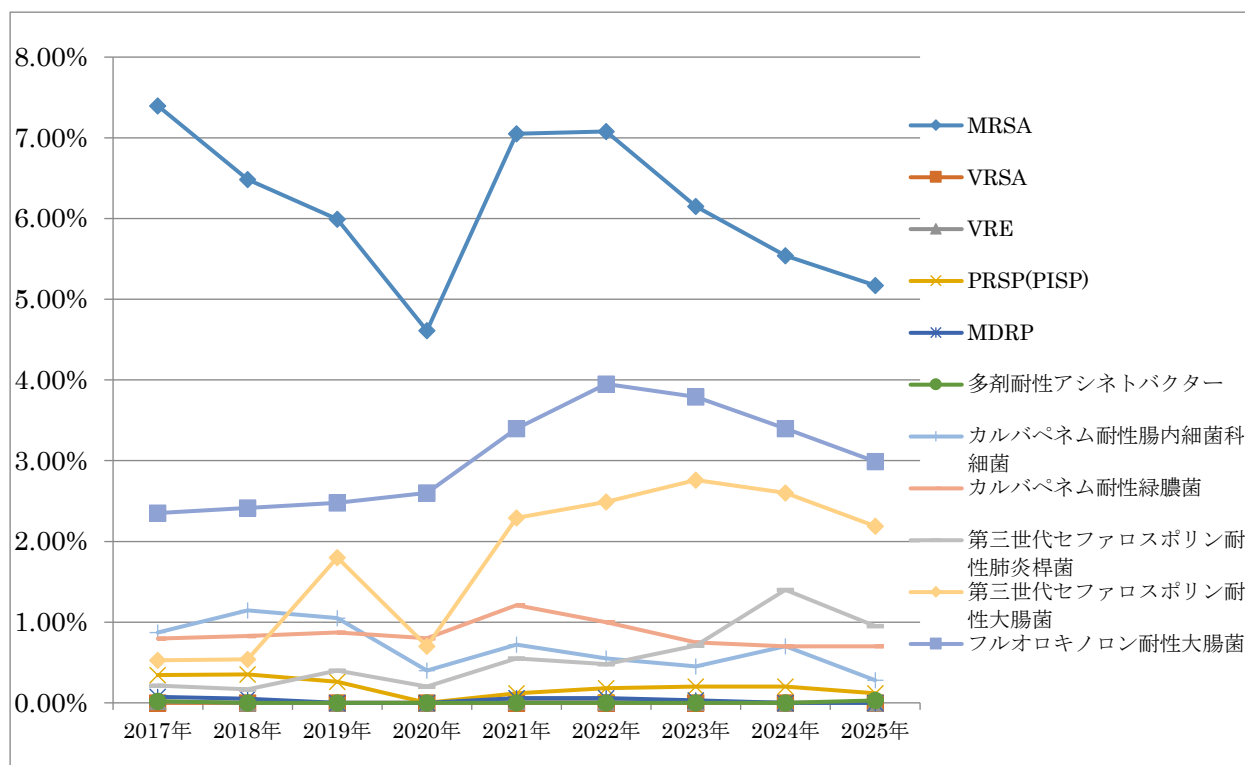


## 耐性菌分離率



抗菌薬の血中濃度測定の解析と同様、院内の耐性菌検出率を把握することは、抗菌薬適正使用を推進していくうえで重要な臨床指標の一つである。

当院は、2012年より厚生労働省院内感染対策サーベイランス事業（JANIS）の検査部門へデータを提出し、還元された結果を公表している。

2025年で目立った傾向は、検出率が1%以上の菌種について注目すると、MRSAは2022年より年々減少傾向である。また、2019年度より増加傾向であったフルオロキノロン耐性大腸菌も2022年より徐々に減少傾向である。さらに注目すべき点として、第三世代セファロスポリン耐性大腸菌について2018年以降上昇傾向を示していたが、2024年、2025年と徐々に減少に転じている。これは2024年より接触予防策の対象菌にESBLを含め対策を実施した成果が現れていると考えられる。

今後、AST（抗菌薬適正使用支援チーム）を中心に、より一層の抗菌薬適正使用を推進すると共に、水平伝播予防対策の強化など適切な感染管理に努めていく。

\*算出式：（対象菌の検出患者数／検体提出総患者数）×100（%）

（同一患者で異なる病棟から検体が提出された場合は1患者としてカウント）

データ提供：医療の質・安全対策部 感染対策室